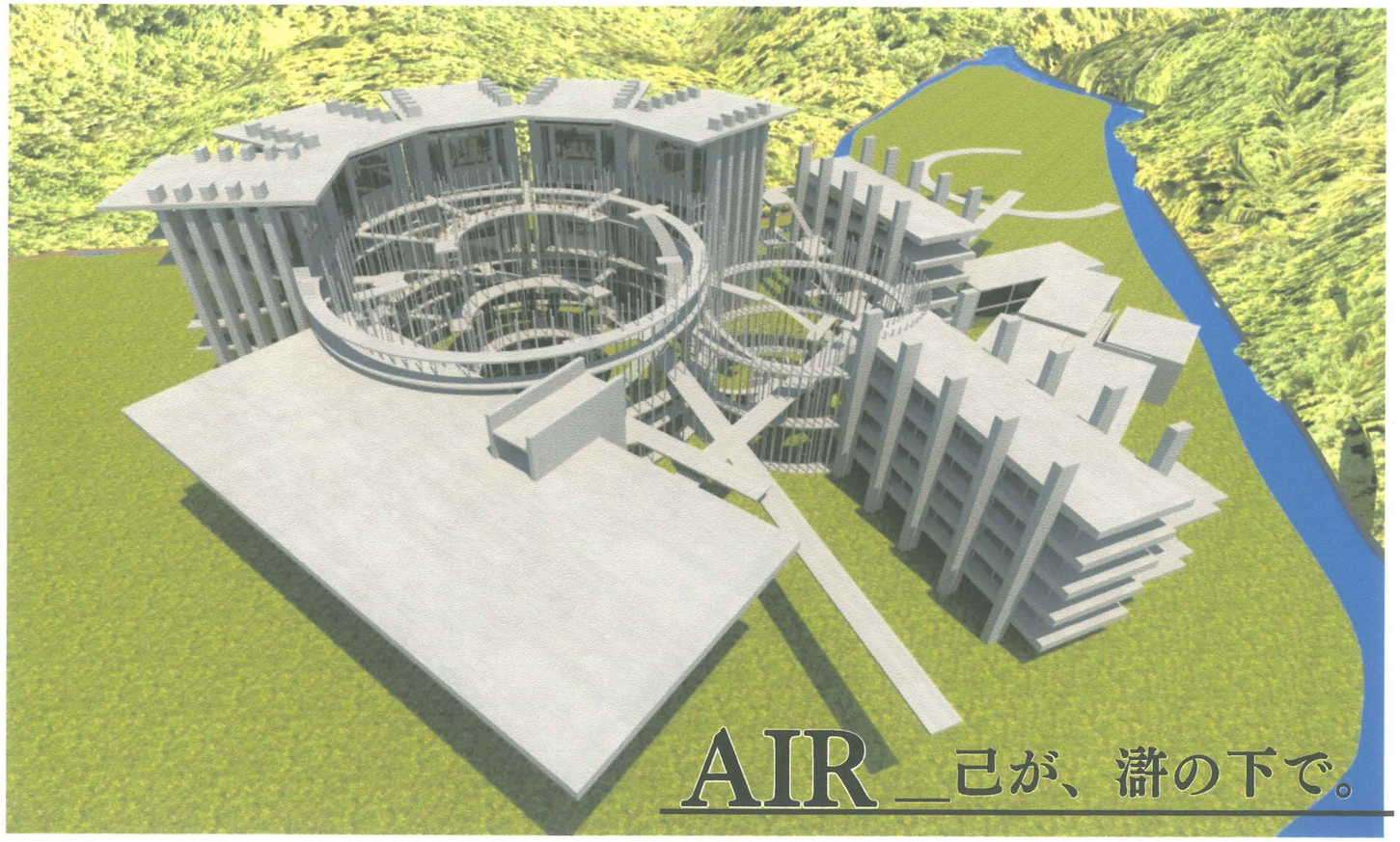
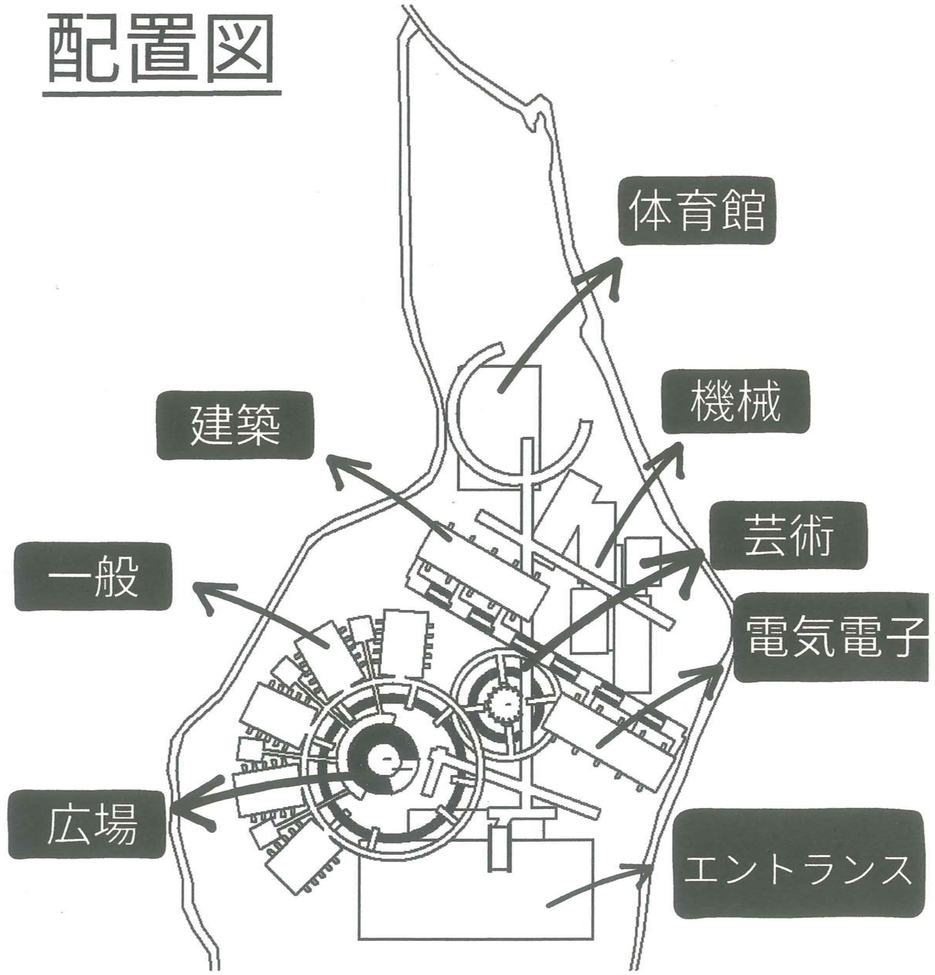


配置図

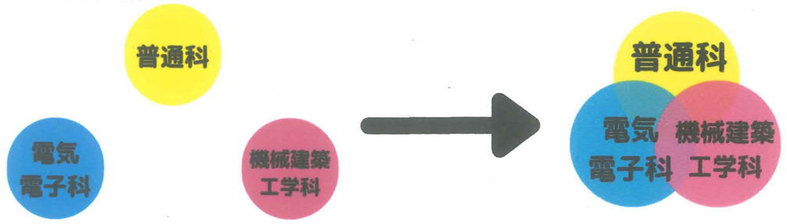


母校を『青春から大人になる場所』へ。

01　現在の吉田高校

Ⅰ．三つの学科の分離

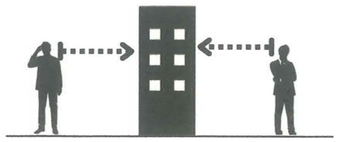
吉田高校は、全国的にも珍しい工業科と普通科が併設された学校である。普通科・機械建築工学科・電気電子科の３学科。それぞれが離れた場所で学び、閉鎖的に過ごしている。せっかく全く色の違う学科が集まっているのだから、学科の垣根を超え、繋がりを大切にしながら、共に高めあえるような学校にしたいと考えている。

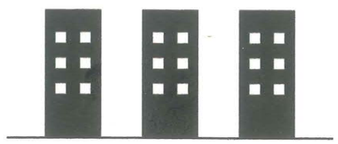


現在の吉田高校

Ⅱ．校舎の配置による生徒の交流の滞り

校舎に配置によって他学科の生徒とのつながりが希薄になっている。校舎が並列に並び、目線が通りづらく人と顔を合わせる機会が減少。また、各学科ごとに校舎がありHR教室や授業を受ける教室が決められている。


目線が通らない


各学科ごとの校舎
(行動範囲の制限)

02 主体性を育てる

Ⅰ．単位制の導入

全日制の受動的な学びから単位制の能動的な学びの形にし、生徒自らが、自分に必要な授業を考えさせる。自立を促し、主体性を引き出し育てたい。また、学科に限らず自らが選択した授業を共に受けることで、他学科の生徒とのコミュニケーションが増え、互いの知識や経験を交換しながら成長していくことができる。

03 距離感を大切に

建物や教育カリキュラムによって分離された生徒たちの距離を縮めたい。互いが手を振り合える様に、建物間の距離を縮め、空中回廊で繋ぐ。各教棟と施設は、エントランスと広場に向かって配置し、誰が何処で何をしているかわかるような環境にすることによって、安心感が生まれ、心の距離がぐんと短くなる。

メインコンセプト

『青春から大人になる場所』

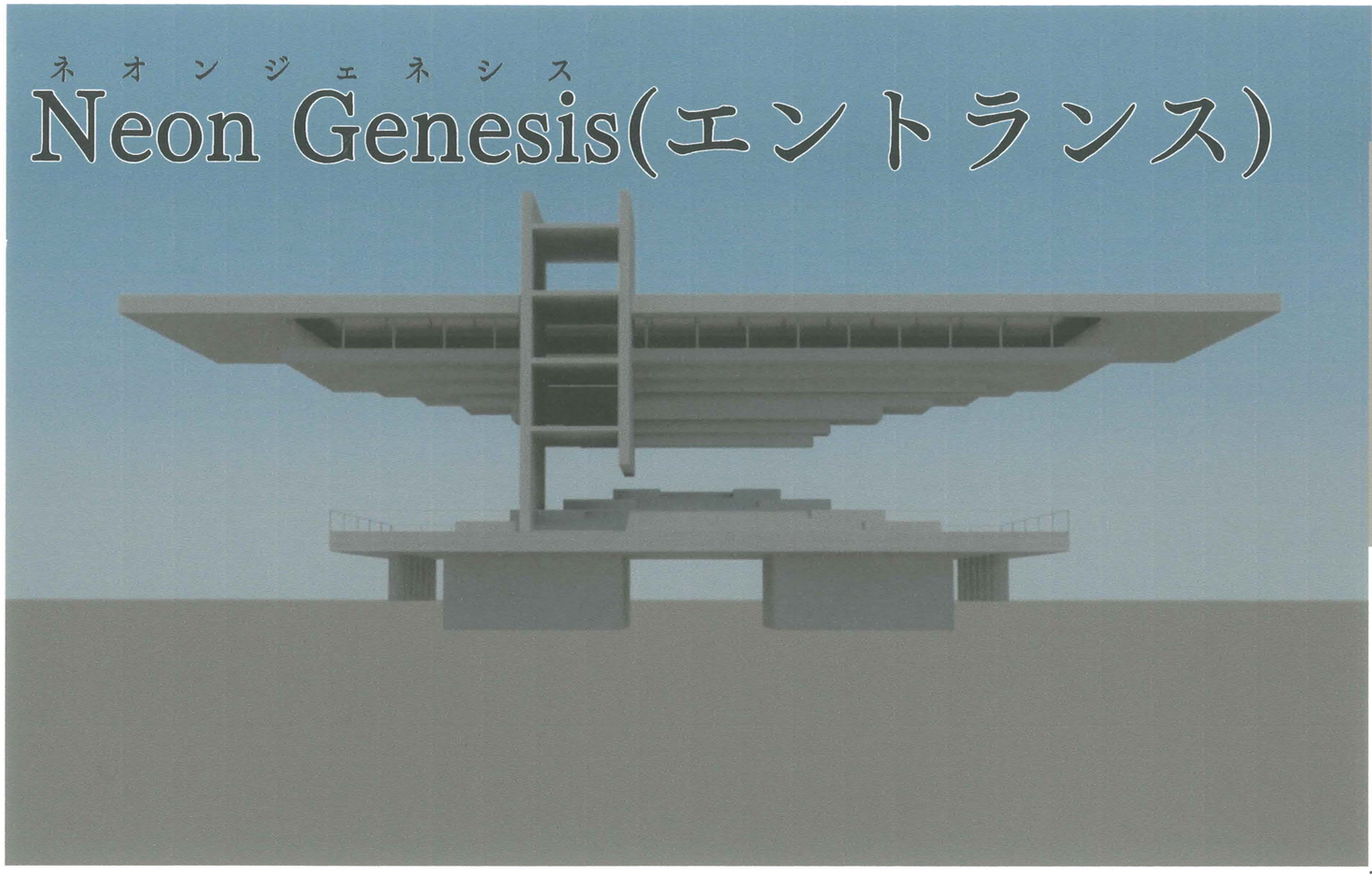
機能的コンセプト

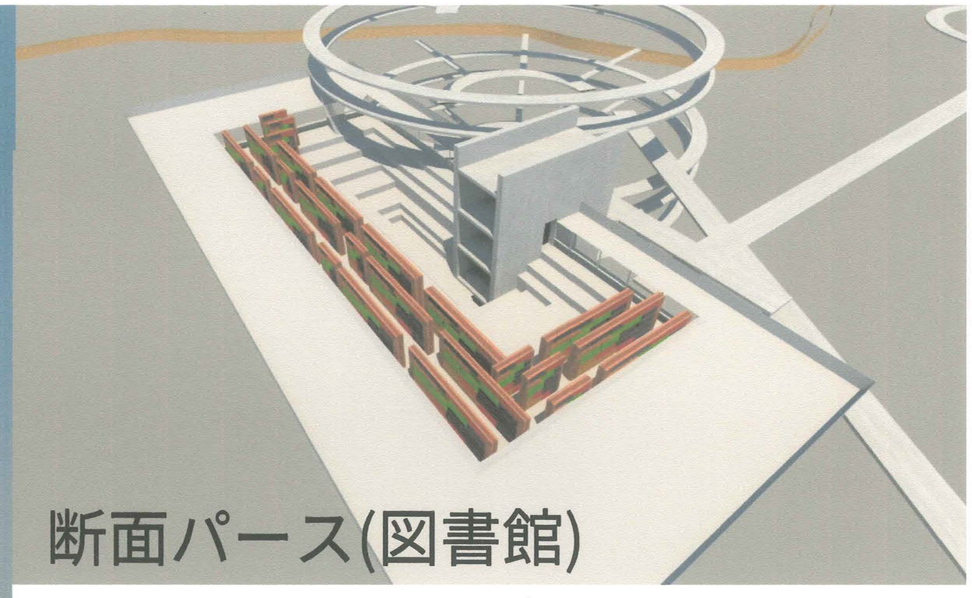
『自立を促す』

意匠的コンセプト

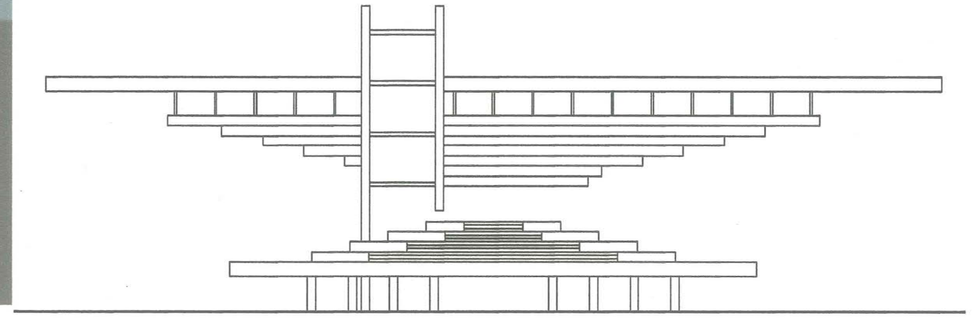
『手を振り合える様な』

Neon Genesis(エントランス)





断面パース(図書館)



Neon Genesis(エントランス)

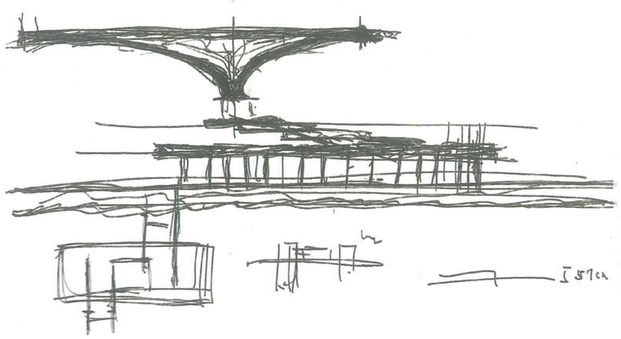
シンボル×空中回廊×図書館

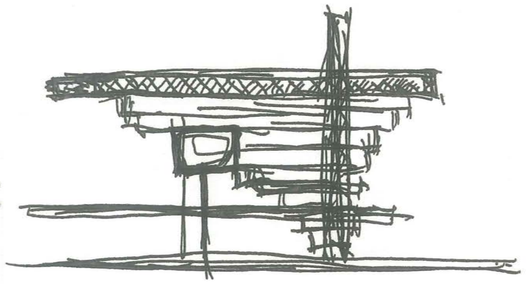
学校の玄関は、生徒や教員、来客など多くの人が通る。いわば、学校の顔と言ってもいい。まずは、学校のシンボルとなるようなデザイン性の高い建物を考えた。イメージとしては、勉学は知識を積み重ねるという考え方から、層を集積させるようなイメージで外観をデザインした。

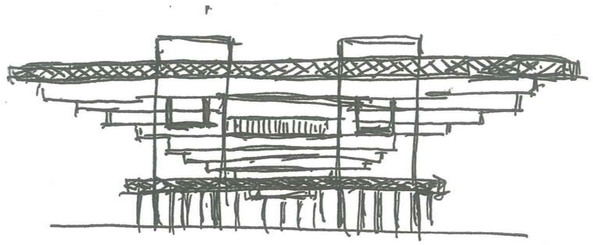
生まれ変わる吉田高校、すなわち新しい時代が始まるということで、この建物を『ネオンジェネシス』と名付けた。

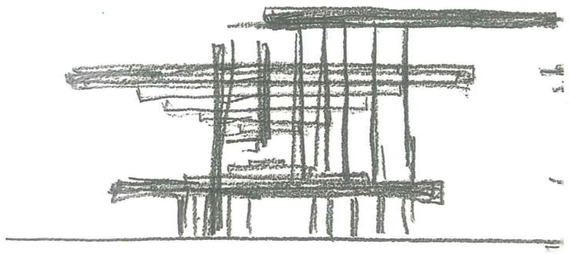
この建物は校内の全ての建物に繋がっている。全てを繋ぐのは空中回廊『スカイハイ』。空中回廊を通ってどこにでも行くことができる。『ネオンジェネシス』の最上階には、図書館があり、多くの人に利用してもらう為に、貸し出しの方法を生徒の個人端末によるバーコード読み取りで借りるシステムを導入したい。

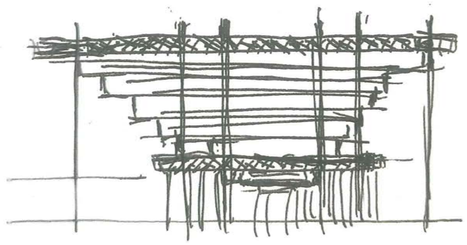
【デザイン原案】

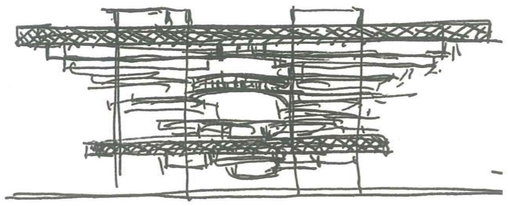


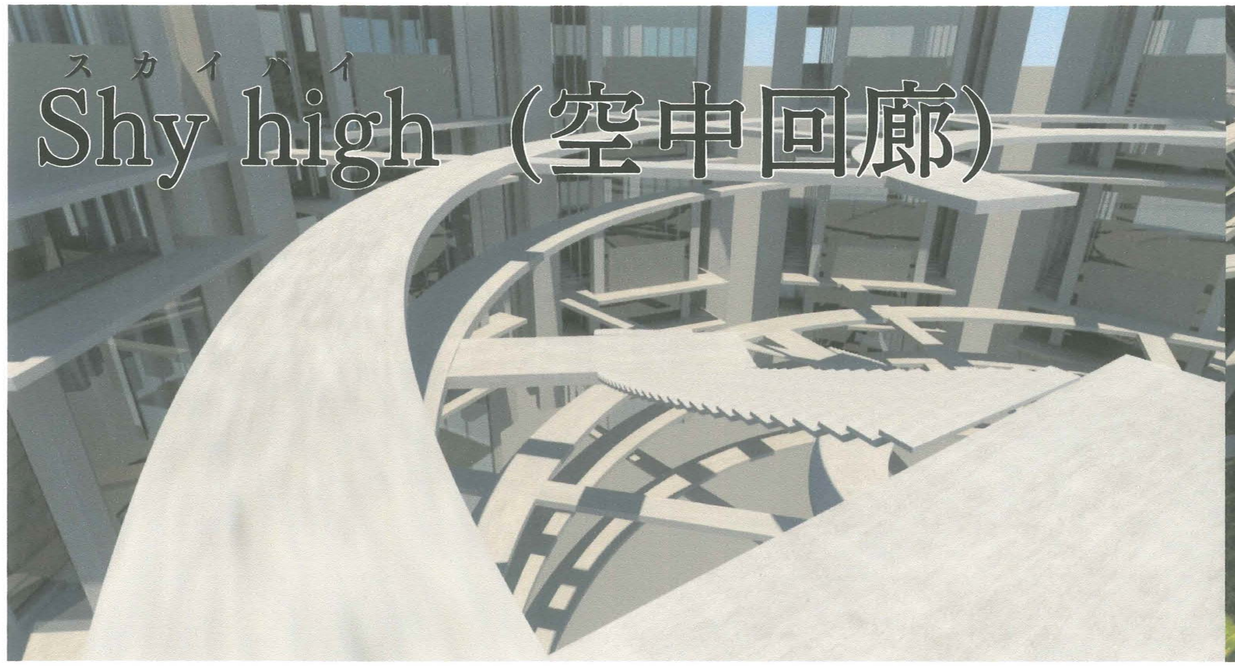


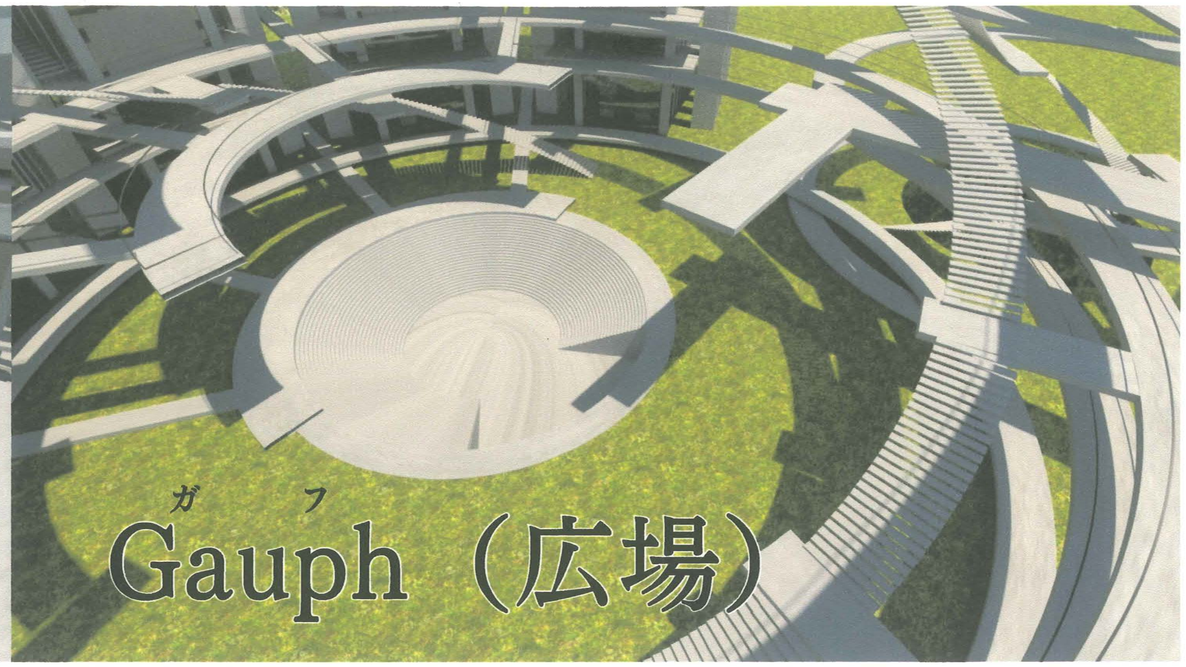








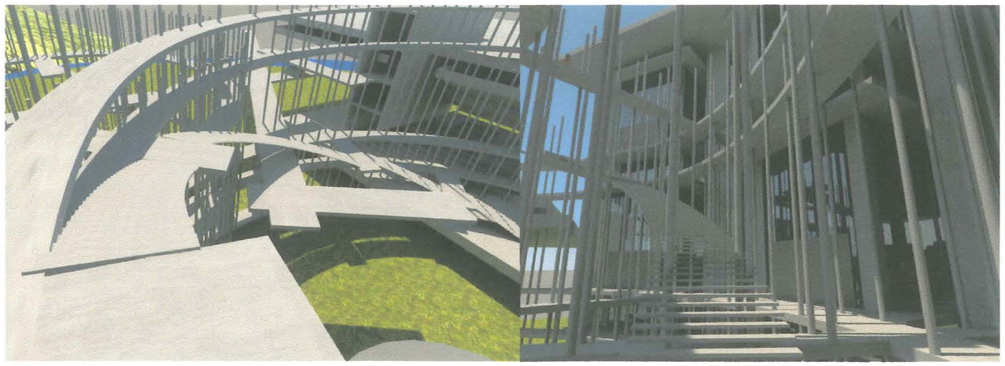




shy high (空中回廊)

校舎を繋ぐ道

この学校の校舎には室内階段や室内廊下がなく、ほぼすべての移動を空中回廊にて移動する。その為、一つの教棟だけで一日を終えることがなく、学校全体を利用して学ぶことになる。

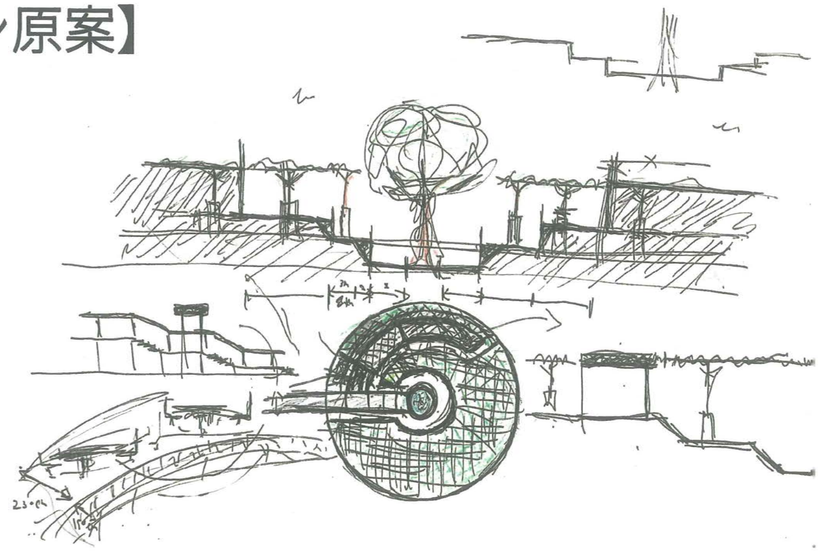


Gauph（広場）

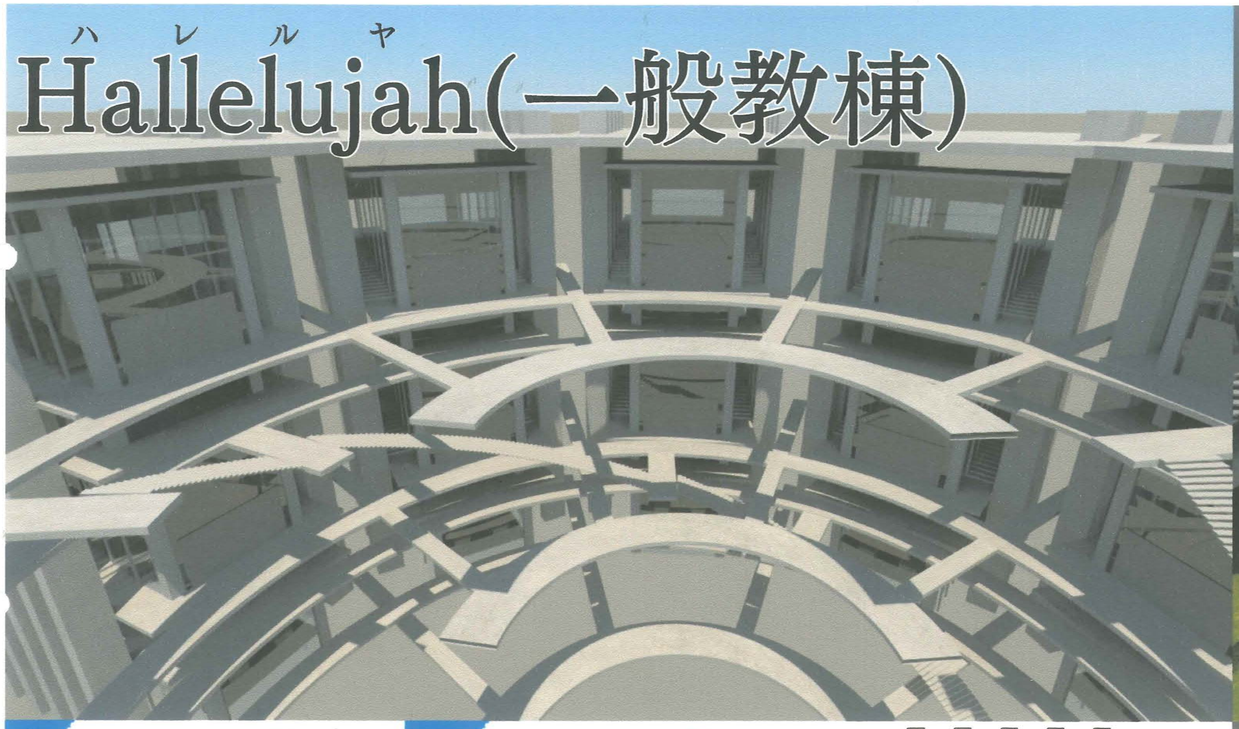
共に語らう広場

「手を振りあえる様な」のコンセプトが顕著に現れているのは、この『ガフ』である。このガフは、政治的な活動や市民の憩いの場である、古代ローマ建築のフォルムを参考にしてつくられている。その為、生徒には実際に「手の振り合えるような」距離で、夢を語り合ったり、お互いの意見交換をしたりする場にしてほしい。『ガフ』を空中回廊の中央に置くことで、広い空間に人が集まり、『ガフ』を学校全体の中心となる場所にすることが狙いである。

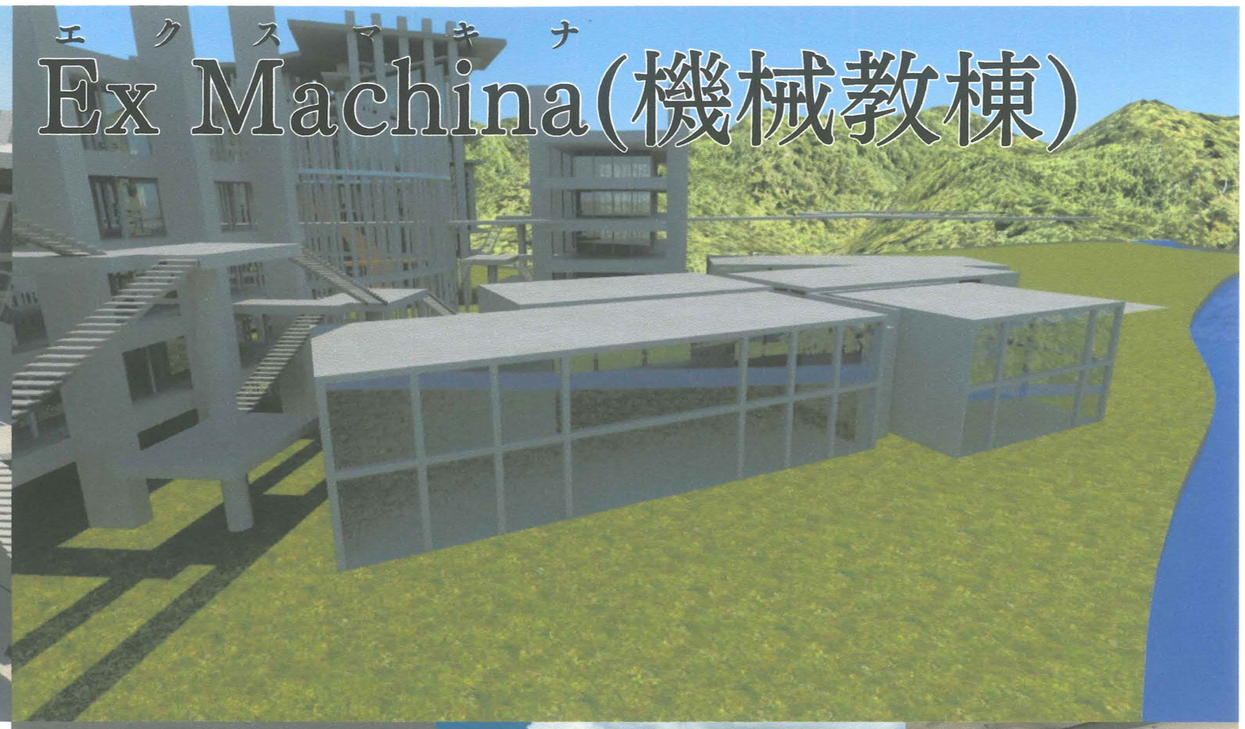
【デザイン原案】

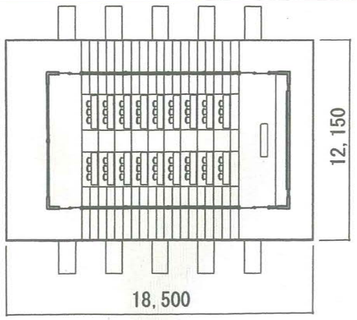


Hallelujah(一般教棟)



Ex Machina(機械教棟)





平面図(教室)

現在の実習室

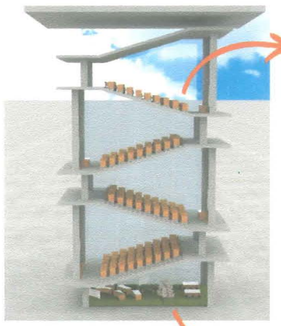
Hallelujah(一般教棟)

交わる個性

一般教棟は、３学科の生徒が普通教科を学ぶ場所で、単位制の導入によりどの学科の生徒もそれぞれ選択した普通教科を同じ教室で受けることになる。共に学ぶことができることに喜びを感じてほしいことから、この建物を『ハレルヤ』と名付けた。

授業を受ける教室は、大学の大講義室のようなつくりにした。クラス単位で授業を受けるわけではないし、自分の意志で好きな席で授業を受けてほしい。

また、HR教室を設けていないので、どこでどう過ごすかは自分で考えなければならない。その代わり、空き教室を設けており、自習室やラウンジとして使用することができる。



授業教室(普通教科)

空き教室(ラウンジ)

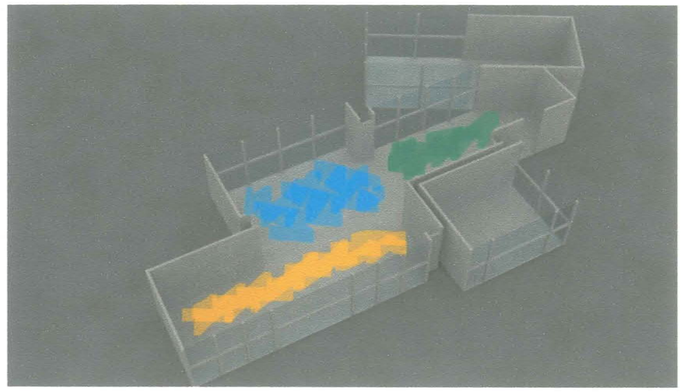
Ex Machina(機械教棟)

工業実習の強化(環境整備)

吉田高校の機械建築工学科は、実習や課題研究の時間が多く、ものづくりに力を入れている。しかし、狭い教棟に実習室や作業室を密集させているため、作業スペースが狭く、機械や材料の運搬が大変など、環境面での問題がある。他の教棟とは違い、低層にし、建物を５つに分割した。建物を分割することで、ゆとりのあるスペースをつくり出すことができ、作業や物の運搬が楽になる。また、実習の工程をスムーズにさせるために一つの校舎内で加工→けがき→手仕上げができるようにした。

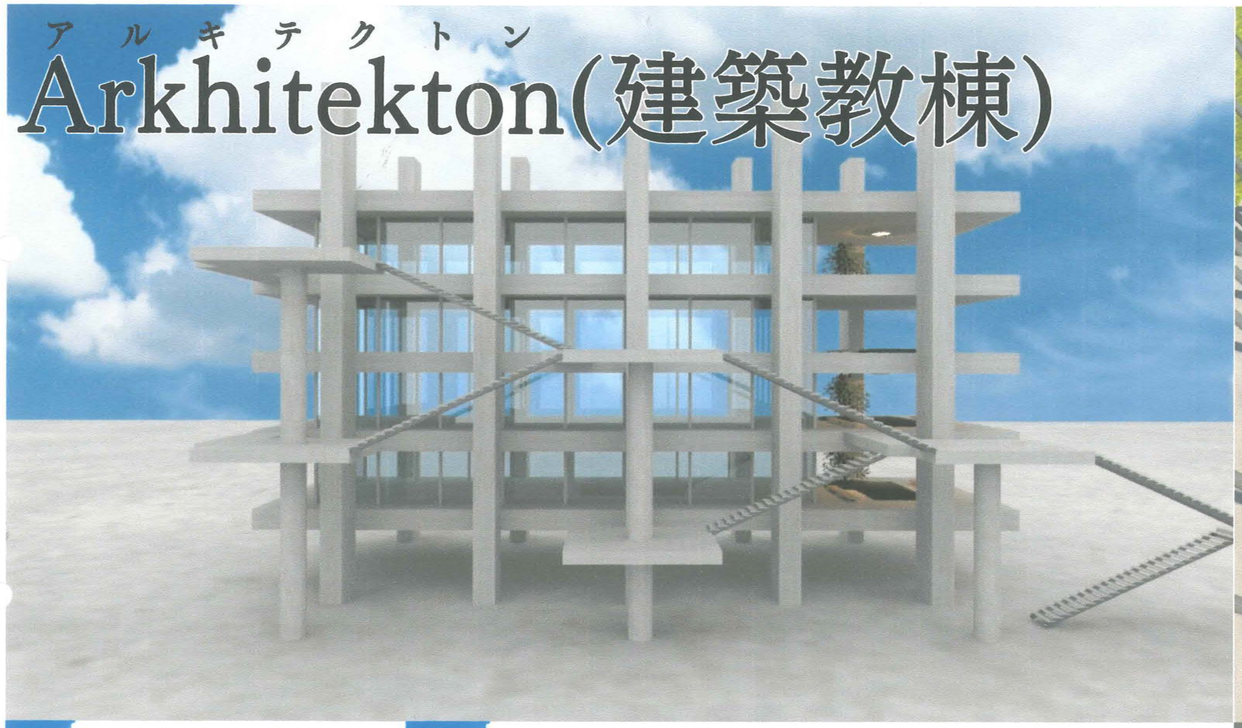
ものづくりによって、社会を支える工業人になってほしいことから、この建物を『エクスマキナ』と名付けた。

実習の工程
加工：黄→けがき：青→手仕上げ：緑)



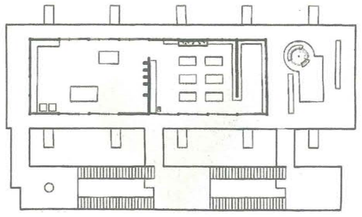
Arkhitekton(建築教棟)

アルキテクトン

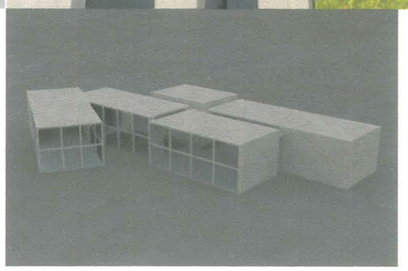


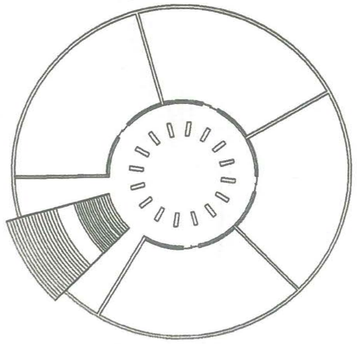
Avant-Garde(芸術教棟)

アヴァンギャルド



平面図(教室)





Arkhitekton(建築教棟)※電気電子教棟も同じデザイン

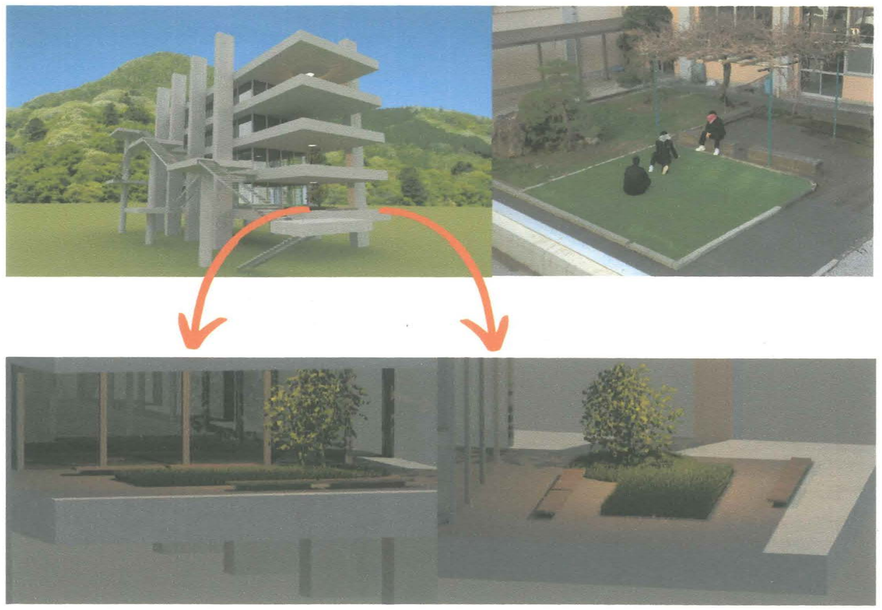
校舎内の憩いの場

建築教棟と電気電子教棟には、憩いの場を設けた。校舎内にゆったり落ち着ける、癒しの空間をつくりたいと考え、現在の吉田高校にある建築教棟すぐそばの庭園を参考にすることにした。

憩いの場は各階のデッキにあり、壁が無く開放感があるので、休み時間などにリフレッシュすることができる。

この建物は、古代ギリシア語で建築家を指す『アルキテクトン』と名付けた。

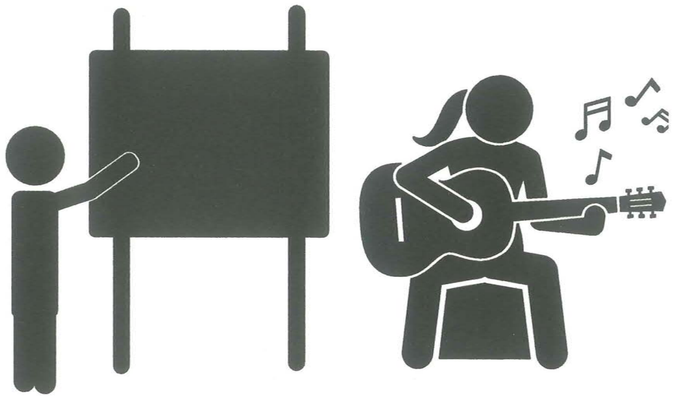
現在の吉田高校の庭園



Avant-Garde(芸術教棟)

地下に埋まった芸術

現在の吉田高校には芸術教棟がない。以前は、芸術教棟があったが、耐震基準の関係で取り壊しになった。現在は、普通の空き教室を使って授業をしている。せっかく美術や音楽の授業を受けるなら、整った環境でなおかつ専用の教室で授業を受けたいと思うので、新たに芸術教棟をつくることにした。

地下室ってなんかワクワクする。学校に地下室があったら楽しそう。芸術教棟なら適していると考え、芸術教棟を地下室につくることにした。

主に音楽の授業だが、地下室で行うことで、周りを気にすることなく音を出せる。